岩根圀和著

贋作ドン・キホーテ

ラ・マンチャの男の偽者騒動

中公新書

1395

中公新書 1395

岩根圀和著

贋作ドン・キホーテ

ラ・マンチャの男の偽者騒動

中央公論社刊

岩根圀和（いわね・くにかず）

1945年（昭和20年），兵庫県生まれ．
神戸市立外国語大学修士課程修了．
現在，神奈川大学教授．
訳書 カルデロン・デ・ラ・バルカ『名誉の医師』
（大学書林）
ミゲル・デリーベス『赤い紙』（彩流社）
『バロック演劇名作集』（国書刊行会，共訳）

贋作（がんさく）ドン・キホーテ
中公新書 *1395*
©1997年
検印廃止

1997年12月10日印刷
1997年12月20日発行

著　者　岩根圀和
発行者　笠松　巌

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104-8320
東京都中央区京橋 2-8-7
電話　販売部 03-3563-1431
編集部 03-3563-3666
振替　00120-4-34

◇定価はカバーに表示してあります．
◇落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送りください．送料小社負担にてお取り替えいたします．

Printed in Japan　ISBN4-12-101395-6 C1298

まえがき

灼熱の太陽に灼かれるカスティーリャの大地を今なら適度に冷房の効いた列車の車窓からゆったりと眺めることができる。しかし三百五十年ばかり以前、頭に異常をきたした五十男が甲冑(かっちゅう)を太陽にぎらつかせながら歩いた。夏場なら四十度を優に越す平野である。すでに変調をきたしている脳味噌が完全にゆで上がる。これは相当の体力を要する旅であろう。それに加えて巨人だの魔法使いだのと死闘を演じて姫君を擁護しなければならない。まことに遍歴の騎士たるもの強靭なる体力を要する務めである。それを承知で遍歴の騎士道の旅へ出たドン・キホーテが、広野に立つ風車を巨人と思い込み、必死にとめるサンチョをふりきって槍を構えて突きかかっていく。『ドン・キホーテ』前篇第八章の逸話である。そのとき運悪く吹き付けた風に風車の翼がぐるりと回って騎士は槍もろとも空へ引き上げられて地面に転がった。あまねく人口に膾炙して子供の絵本にもなるほどに有名な場面である。しかしこの場面がそれほど愉快だろうか。分別ざかりであるはずの五十男の狂態ぶりにはむしろ哀れを誘うものがある。そしてこの風車の場面だけをも

ってドン・キホーテのすべてとされる傾向がありはしないだろうか。

世界の名著の知名度にひかれ、教養人としての義務感にせかれて誰もが一度は手を伸ばすドン・キホーテ。文庫本にして六冊の長篇である。確かに、風車にぶつかっていくお目当ての場面がわりと早い所に出てくる。しかし期待したほどのおもしろさではない。その後も当初思ったほどに愉快でもなければ滑稽でもない。だが二冊目にはもう少し滑稽な笑える場面があるかもしれない。もしやにひかれ、思い切って二冊目を借り出してみたがやはり失望する。少しもおもしろくないのである。読者の忍耐はそこまで、三冊目に手を伸ばす人はかなり辛抱強い人であろう。ましてや後篇まで読み通せる人は相当忍耐強く勇気のある人か、あるいはよほど暇な人。いや、暇なだけではとてものことに最後まで読み通せるものではない。よほどの文学好きか、のっぴきならぬ必要性にかられた研究者と言うべきか。

ドン・キホーテは知名度の割には読まれていない。正確には、始めの一冊はどこの図書館でもぼろぼろになるほどよく読まれている。しかし全体の六分の一をもってドン・キホーテの全体を語ることはできまい。そしてドン・キホーテはもともとが騎士道小説のパロディである。なかでも代表作である『アマディス・デ・ガウラ』を手本にしてそれを真似ては失敗を繰り返す。原典を真似てはずっこけるところに笑いを生じる。本物を知っているからこそ物真似芸がおもしろい理屈である。ドン・キホーテのおもしろさのすべてがパロディにあるとは言わないが、原典を知

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc

らないわれわれにはドン・キホーテの滑稽さの相当部分が分からなくなってしまっているのは確かである。これは現在のスペイン人にとっても同様の現象であるが、少なくとも当時のスペイン人にはおもしろかったに違いない。こんな逸話がある。

国王フェリペ三世が散歩の途上、公園のベンチで学生風の男が書物を手にしきりと抱腹絶倒の体である。これを見た陛下が供の者に「あれは『ドン・キホーテ』を読んでおるに相違ない」とお言葉をかけた。学生に確かめてみるとなるほど『ドン・キホーテ』を読んでいるのであった。別のパターンもある。国王が望遠鏡で市街を覗いていると、門口に椅子を据えた男がなにやら書物を読みながら腹を抱えて笑い転げている。「あれはなんであるか」とご下問を受けた家臣が答えて曰く、「おそらく『ドン・キホーテ』を読んでおるのでございましょう」。

嘘にもせよこんな話が作られるほどに『ドン・キホーテ』はおもしろかった。であればこそ『ドン・キホーテ』の贋作(がんさく)が現れたのである。むしろ偽物が現れるほどにおもしろかったと言うべきかもしれない。セルバンテスは、前篇の好評に気を良くして後篇を出版するつもりで執筆に励んでいた。ところがセルバンテスの真作の上梓よりも一年前、まさに目と鼻の先に贋作が出版されたのである。贋作の表紙には作者アベリャネーダなる人物の名前から印刷所まで、いささかも悪びれるところなく堂々と刷り込んである。なくてはならない査定証までがきちんと完備している。ところが作者は偽名、査定証の人物も架空、印刷所は実在するけれどドン・キホーテを印

刷した記録なし。何から何まで偽物だらけ、どれひとつ実体がないのである。ただの思いつきで偽物を書いたとは考えにくい、いかにも念のいった手の込んだ贋作である。

本物の執筆中にまんまと先を越されたセルバンテスの心中は穏やかでない。怒り心頭に発したか、それとも大様(おおよう)に構えて無視するか、あるいは多少ともに反論を加えるか。それにもまして贋作者アベリャネーダとはいったい何者であるのか。セルバンテスが後篇の執筆中であることを承知で、その目と鼻の先にわざと贋作をぶつけてきた意図はどこにあるのか。これらの点に関してはまだまだ謎が多くて断定的なことは言えない状態である。考えようによってはアベリャネーダの贋作ドン・キホーテは、セルバンテスの真作ドン・キホーテのパロディであるとも言える。パロディのパロディなのか、それとも純粋にセルバンテスの贋作なのか。ともかく贋作のドン・キホーテも真作とおなじく純真素朴な農夫サンチョ・パンサを従士に雇ってマンチャの広野へ遍歴の旅に出るのである。われわれはその狂気の旅に同行するだけの体力も時間もないが、せめて真作と贋作の書物の空間をしばらく旅してみたいと思う。

目次

まえがき　i

第一章　不死身のドン・キホーテ……3

第一の門出　第二の門出、風車の冒険　風車の歴史　マンチャの風車　初めて風車を見たドン・キホーテ　ビスカヤ人との喧嘩　旅籠の災難　羊と山羊の群れの冒険　石礫と棍棒の嵐　贋作のドン・キホーテ　ドン・キホーテの入牢　芝居の一座から終章へ

第二章　贋作『ドン・キホーテ』……57

贋作の出現　どこで印刷されたのか　セルバンテスの反応　セルバンテスの悪態　アベリャネーダ

とは何者　アベリャネーダの宗教性　偽ドン・キホーテの宗教三昧　「失意の富者」　「幸せな恋人達」　アベリャネーダはドミニコ会士か　ドン・キホーテの失恋　真作から贋作へ　贋作から真作へ

第三章　『ドン・キホーテ』の序言論争……125

なぜ贋作を書いたのか　ローペ・デ・ベガの芝居　セルバンテスの芝居　作者の不思議　第一の作者、シーデ・ハメーテ・ベネンヘリ　翻訳者のモーロ人　贋作者、賢者アリソラン　芝居のドン・キホーテたち、ローペとティルソ　ギリェン・デ・カストロのドン・キホーテ　カルデロンのドン・キホーテ

第四章　ドン・キホーテの歩いた道……181

ロシナンテの歩く距離　「名は思い出したくない村」の所在　遍歴の騎士、第一・二の旅程　贋作ド

ン・キホーテの道筋　アラゴン王国の首都サラゴサ
アルカラ・デ・エナーレス　マドリッド　本物ドン・キホーテ、第三回目の旅程　ドン・アルバロとの邂逅の不思議
あとがき　220

贋作ドン・キホーテ

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

第一章　不死身のドン・キホーテ

第一の門出

真夏とはいえスペインの中央高原地帯は明け方ともなればさすがに肌を刺す冷気が人を襲う。そんなある日の払暁（ふつぎょう）、裏庭に植わったオリーブの樹が細長い葉裏に下露を結ぶ頃合、音に聞く名馬ロシナンテにまたがって広漠たるモンティエールの大地へと踏み出したのはドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ。

暁闇の冷気がようやく衰え、陽が昇るとともに暑さを増して真昼ともなれば炎暑が岩を焼き、大地を焦がして耐え難きまでの炎熱地獄である。おんぼろとは言い条、曲がりなりにも金属の甲冑に全身を包んでいるドン・キホーテである、その表面に戯れにぶどう酒をかければジュッと煙を噴いてたちまちに跡形もなく蒸発するほどに焼けている。その暑さたるや推して知るべし、もしドン・キホーテにいくらかでも脳味噌が残っていたら間違いなく蠟のように熔け出してしまっ

たに違いないと作者セルバンテスは言う。

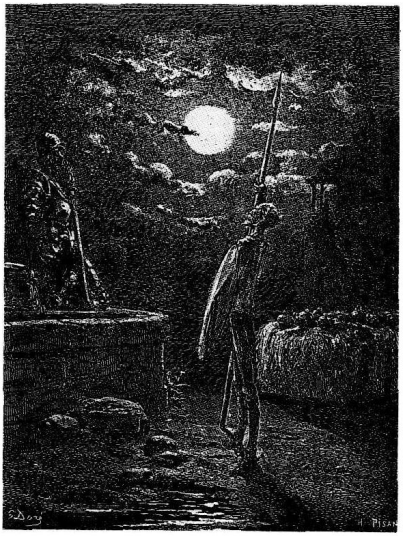
かくして遍歴の冒険を求めて門出を果たした初日、炎天下の酷暑と戦う他は語るほどの事件もなく、つつがなく陽は落ちて旅籠へと着いた。狂気の幻想からこの旅籠を城砦と見て、その城主の許しのもとに甲冑の不寝の番を始めるのが第三章の主な出来事である。正式な騎士となるのにこの儀式が必要なのだ。

旅籠に泊まり合わせた人々の好奇の眼差しを尻目にドン・キホーテは、皎々たる月明かりのもと、裏庭の水槽の上に甲冑を置いてその前を行きつ戻りつ不寝の番に入る。ところが騾馬に水を飲ませようとした馬方が、事情を知らずにか、あるいは知っていても気に止めなかったのか、ドン・キホーテの制止を無視して邪魔な甲冑を無造作に脇へ放り投げてしまった。彼は持った槍を振りかざし、馬方の頭に凄まじい一撃を加えて地面に叩き伏せたのである。もう一撃を加えていたら医者は必要なかったと言う。

仲間が地面にのびてしまったのを知る由もなく、いまひとりの馬方がやってきて同じく騾馬に水を飲ませるために甲冑をのけようとした。今度はドン・キホーテは無言のまま槍を叩きつけ、頭を粉々とは言わぬまでも四つ割りにしてしまった。有り体に言えば殺してしまった。もっとも、殺したとなるとドン・キホーテの身柄もそのままではすまないわけで、ここは話半分に聞いておくとして、仲間の馬方たちがたちまちドン・キホーテめがけて石礫を雨霰と降らせ始めた。

狂人とはいえ非はドン・キホーテのほうにある。しかしそのままに放っておけば大惨事となるところを宿の亭主の臨機応変な処置で事なきを得て甲冑の番を無事終え、晴れて騎士となることができた。翌朝、ドン・キホーテは亭主の助言を入れて遍歴の騎士に必要な日常の品々、ならびに忠実な従士をひとり調達すべくロシナンテの轡を村へと向けるのだった。

村へ戻れる嬉しさに心も軽くロシナンテが早足にだくを踏んでいくらも行かぬうちに右手の林に悲鳴を聞きつけ、茂みを分け入ってみればなんと屈強の大男がか弱き少年アンドレスを樫の幹に縛り付け、革帯で打ち据えるという乱暴狼藉。さっそくに縛めを解かせ、極悪非道の悪人の手からいたいけな小児を助けだした冒険の上首尾を思い返して自己満足にひたるうち、ムルシアへ絹の買い付けに行くトレド商人の一行と遭遇する。



甲冑の不寝の番につくドン・キホーテ
（ギュスターヴ・ドレ画，19世紀）

左手はなだらかに起伏を繰り返す丘がはるか目路のかなたにまで続く丘陵地帯。右側はゆるやかに下り、灌木の茂みをまばらに散らす広大な平野に落ちる。その間を縫

うように流れる間道はごろた石の転がる険路である。いままさに大地を白々と焼き尽くす炎天下のもとを商人一行が無心に近づいてくる。その行く手に立ちふさがった甲冑の化け物が「ドゥルシネーア姫こそは世界に冠たる美貌の持ち主である」と認めろ、と言い募るのだから驚きよりも薄気味悪さのほうが先に立つのも無理はない。行く手を遮って立ちふさがった男の異様な風体を見て、これは狂っているといち早く悟ったひとりがいたずら心を起こしてドン・キホーテをからかいに出たからたまらない。

槍を低く構えると眦をつりあげてロシナンテの馬腹を蹴ったまではよかった。いま言った通りこぶし大の石がごろごろと転がる足場の悪い道である。しかも名馬ロシナンテは炎天下を歩いて疲れ切っている。幾らか加速のついたところで見事に蹄を取られて膝を折り、転倒するはずみに乗り手を前方の地面へしたたかに投げ落とした。時代物の甲冑に缶詰状態のままもんどりうって放り出されたドン・キホーテは、天を仰いだまま手足をばたつかせて身をもがくのだが起きあがることができない。そこへ騾馬追いが近づき、転がっていた槍をへし折るとその一片を振り上げてドン・キホーテを死ねよとばかりに打ち据えたのである。やがて叩き疲れ、悪態の限りを尽くし、唾を吐き散らして一行は去って行く。

そのまま動きもならずドン・キホーテは炎天下の地面に転がったまましばらく野ざらしになっていたが、ちょうどそこへ顔見知りの農夫が通りかかり、苦労して胸甲と背甲をはずしてみたが

幸い血の流れる様子はなく、傷跡ひとつ見当たらなかった。朽ちたりとはいえ鎧甲のおかげである。かくしてドン・キホーテを地面から助け起こすと自分の驢馬（ろば）に横様に乗せてのんびりと村へ引いて戻った。

石礫を浴び、地面に転がって多少の青あざとすり傷ぐらいは作ったにせよ、とりたててこれといった怪我もなく無事わが家へ戻れた。これがドン・キホーテの第一の門出の顚末、全五章にわたる冒険であった。

第二の門出、風車の冒険

騾馬追いから袋叩きにあって満身青あざだらけとなり、亀の子のように炎天下に日ざらしとなっていたドン・キホーテが近所の農夫に拾われて戻り、寝床から起きあがれぬまま身体中の打ち身を癒している間、郷士の頭を狂わせたけしからぬ騎士道の書物を村の住職と床屋が厳しい詮議にかけて厳重に吟味のうえ、中庭で焚書の刑を申し渡すのはドン・キホーテの物語の中でも特に有名な逸話である。それから青あざも薄れた頃に、ドン・キホーテはあれこれを質に入れたり売り払ったりしてかなりの金額を用意し、サンチョ・パンサを従士に説き伏せてある夜、誰に見とがめられることもなく、サンチョは女房に別れも告げず、再びモンティエール平野へ踏み出すのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc